

法華初心成仏抄

当世の人何となくとも法華經に背く失に依りて、地獄に墮ちん事疑ひなき故に、とてもかくても法華經を強ひて説き聞かすべし。信ぜん人は仏になるべし、謗ぜん者は毒鼓の縁となつて仏になるべきなり。何にとしても仏の種は法華經より外になきなり。(御書 1316 頁)

【通釈】

今の世の人は、何となくとも法華經に背く罪によって死後、地獄に墮ちることは疑いない。故に、ともかくにも法華經を強いて説き聞かせるべきである。信ずる人は仏になり、誹謗する人は毒鼓の縁となつて仏になる。いずれにしても仏の種は法華經より外にはないのである。

【主な語句の解説】

- ・ 何となくとも～地獄に墮ちん
→法華經を直接誹謗しなくとも、邪宗教を信じる行為が正法に背くこととなり、墮獄となるとの意。
- ・ 毒鼓
→涅槃經に「毒藥を塗つた太鼓を叩くと、聞こうとしなくても、その音が耳に入るだけで命を失う」(大正蔵 12-420A)との説話が説かれている。
- ・ 仏の種
→衆生が成仏得道するための因を植物の種子に譬えていう。法華經の肝心・南無妙法蓮華經のこと。

【背景と大意】

本抄は、弘安元(一二七八)年、日蓮大聖人五十七歳の御時、身延において認められた御手紙です。対告衆は、駿河国岡宮(静岡県沼津市)に在住していた信徒・妙法尼とも言われていますが、定かではありません。

御書名の「初心」とは、初めて発心をし仏道修行を志すことを言います。末法に生を受けた私たちも、過去に一度も下種結縁を受けたことのない本未有善の衆生ですから、その意味からすれば皆が初心の衆生となります。

本抄は、問答形式を用いて法華經と方便権教との正邪を論じ、文底下種の南無妙法蓮華經の教えこそが初心の行者に最初聞法下種する唯一の本法であることを明かされています。またその上で、大聖人は

末法の世には、無智の人に機に叶ひ叶はざるを顧みず、但強ひて法華經の五字の名号を説いて持たすべきなり(御書 1315)

と仰せられ、末法では、一向に南無妙法蓮華經の教えを説く、つまり折伏を實踐することが、時に適つた仏道修行に他ならないと教えられています。

さらに後段において、折伏の實踐には必ず三類の強敵が競うことを述べられて、それらに決して屈することなく、ひたすら正法流布の信心に徹することこそが、成仏のための道であることを示されています。

【参考御書並御指南】

『一念三千法門』 「妙法蓮華經と唱ふる時心性の如来顕はる。耳にふれし類は無量阿僧祇劫の罪を滅す。一念も随喜する時即身成仏す。縦ひ信ぜずとも種と成り熟と成り必ず之に依って成仏す」

(御書109)

御法主日如上人御指南

宗門では古来、謗法嚴誡を宗是として誡めているのであります。したがって、一生懸命に信心に励み、功德を積んでいるようであっても、もし、わずかでも謗法があれば、今まで積んできた功德もたちまちに消え失せてしまうのでありますから、謗法に対しては常に用心を怠りなくしていかなければなりません。そのためには、私どもは常に折伏を忘れず、謗法を破折し、妙法広布へ挺身していくことが最も肝要であります

(大日蓮・平成30年9月号)

『御講聞書』

今末法は南無妙法蓮華經の七字を弘めて利生得益有るべき時なり

(御書1818)

御法主日如上人御指南

末法今時の本未有善の衆生は、直接、法華經を誹謗していなくても、法華經を誹謗している邪義邪宗を信じて、知ると知らざるとにかかわりなく、法華經誹謗の罪を犯していることになり、地獄に墮ちることは疑いがないのであるから、とにかく法華經を強いて説くべきである。なぜなら、信ずる者は仏と成り、誹謗する者も毒鼓の縁となって仏に成ると示されているからであります。

(大日蓮・平成28年9月号)

御法主日如上人御指南

我々は折伏に当たって、たとえその時は相手から反対されても、相手の心田に妙法が下種されたことが縁となって、その人はやがて入信に至るのでありますから、「とてもかたくても法華經を強ひて説き聞かすべし」と仰せのように、この御文をよくよく拝し、障魔に負けず、勇氣と確信を持って折伏に打って出ることが極めて大切なのであります。

(大日蓮・平成28年4月号)